

芸 術

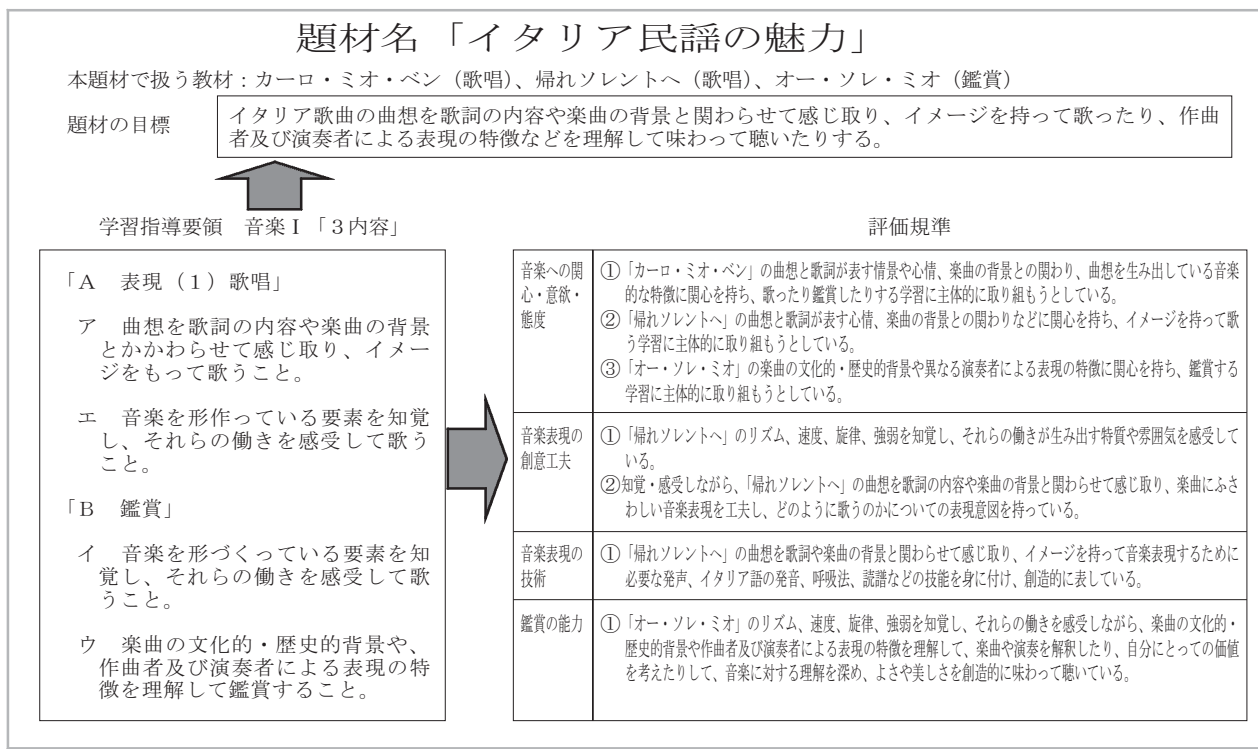
[音 楽]

1 学習指導と評価の改善・充実

全ての生徒に確かな学力を身に付けさせるためには、適切な目標を設定して日々指導を工夫するとともに、生徒の実現状況を確実に把握して、さらにその後の指導に生かすことが必要である。音楽では、学習指導要領にある「A表現」と「B鑑賞」の両領域を関連付けて指導する計画においては、表現領域において、「音楽への関心・意欲・態度」、「音楽表現の創意工夫」、「音楽表現の技能」の3観点、鑑賞領域では、「音楽への関心・意欲・態度」、「鑑賞の能力」の2観点で評価をすることになっており、各学校においては、題材の指導のねらい等に応じて、評価規準を設定することが大切である。

次は、音楽Iの「表現（歌唱）と鑑賞を関連付けた題材構成による学習活動を行う際の題材の目標と評価規準の例」である。

【表現（歌唱）と鑑賞を関連付けた題材構成による学習活動を行う際の題材の目標と評価規準の例】



学習指導要領に基づき、題材の目標と評価規準を定め、生徒の状況を適切に評価することにより、指導の改善・充実に生かすことができる。評価規準の実現状況が良好でない場合、努力を要する状況の生徒への手立てを講じておく必要があり、例えば、上記題材の例では、ある歌曲を歌唱で表現することと、表現特徴を理解して鑑賞することを目標としているが、生徒に、ある演奏者の表現の特徴を理解させることが難しいと判断した場合には、着目させる要素（音色、強弱など）をはっきりと示して鑑賞させたり、全く対照的な特徴を持つ異なる2つの演奏を比較させ、その特徴に気付かせたりするなどの、指導の工夫が考えられる。

2 「確かな学力」を育成する取組の改善・充実

ここでは、学習指導要領のねらいに即した効果的な指導の実践事例として、身の回りにあるサウンドロゴを取り上げて創作に取り組む、音楽Ⅰの「身近な音に耳を傾けよう」という事例を取り上げる。

事例：音楽Ⅰ【身近な音に耳を傾けよう】

題 材 名	身近な音に耳を傾けよう（音楽Ⅰ）
教 材	・放送やコマーシャルなどで用いられているサウンドロゴ
題 材 の 目 標	身近にある音素材に着目し、作品を分析的に聴取する活動を通じて、用いられている音素材や音楽を形づくっている要素を知覚・感受し、感じ取った音楽的内容を用いて音素材の組み合わせを工夫する等、イメージを持って創作し、意図を持って表現する。
対応する学習指導要領の指導事項	「A表現」（2）器楽 イエ、（3）創作 エ 「B鑑賞」 イ
共通事項に相当する事項	音色、リズム、速度、旋律、強弱
対応する内容の取扱い	（5）、（6）および（8）

題材の評価規準

音楽への関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能	鑑賞の能力
①サウンドロゴに内包された音素材の特徴や表現上の効果との関わりに関心を持ち、鑑賞する学習に主体的に取り組もうとしている。 ②サウンドロゴを形づくっている要素（音色、リズム、速度、旋律、強弱など）の働きの変化に関心を持ち、イメージを持って創作する学習に主体的に取り組もうとしている。	①サウンドロゴを形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気などを感じ取りながら、要素を変化させることによって生み出される音楽の表情や雰囲気などを感じ取り、表現したいサウンドロゴをイメージして表現を工夫し、どのように創作するかについて表現意図を持っている。	①サウンドロゴを形づくっている要素の働きを変化させて、創作に必要な技能（課題に沿った音の組み合わせ方、記譜の仕方など）を身に付け、創造的に表している。	①サウンドロゴを形づくっている要素（音色、リズム、速度、旋律、強弱など）を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気などを感じ取りながら、音色の特徴と表現上の効果などの関わりを感じ取って、音楽に対する理解を深め、表現されている内容を創造的に味わって聴きとっている。

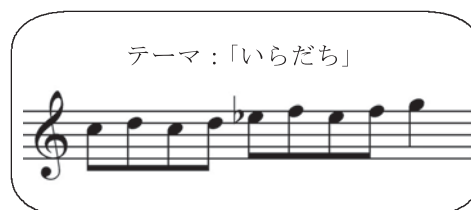
指導計画

題材全体の学習指導		評価の位置付け			
時	主な学習活動の展開 (学習形態)	○評価規準 【主な評価の対象】			
		音楽への関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能	鑑賞の能力
1	例示されたいくつかのサウンドロゴの鑑賞を通じて、表現の意図や用いられている音素材の特徴に関心を持つ。（一斉） 複数の作品を比較鑑賞し、音楽的要素の変化が醸し出す雰囲気や表現の違いについて、知覚・感受する。（一斉）	①学習する内容への関心 【ワークシート】			①知覚・感受に基づく創造的な鑑賞 【ワークシート】
2	特定のテーマに基づいてサウンドロゴを構想し、創作する。（個別）			①鑑賞で知覚・感受した内容に基づき創造的に創作する技能 【作品】	
3	前時に創作した作品をグループで検討し、表現を工夫する。（グループ）		①知覚・感受に基づく創意工夫 【作品】		
4	創作したサウンドロゴを発表し、互いの作品を批評する。（一斉）	②テーマと表現上の効果との関わりに対する関心 【ワークシート】			

本事例では、第1時で、実際のサウンドロゴの鑑賞を通じて、ある一定のテーマやイメージが表現されていることについて知り、その技法について学習する。その際、教師による例示が重要であるが、音色、リズム、速度など、音楽に内包される諸要素が変化することにより表出する雰囲気やイメージの変化に着目させ、技能として創作に活用できるよう指導する。

第2時では、例えば「楽しさ」「いらだち」など、簡素なテーマについて音を使って表現する活動に取り組む。実際の活動に際し、構想段階では五線譜だけではなく、文字・絵・図・記号など、表現したい音響にふさわしい方法を用いるよう指導することも考慮したい。

【第2時で構想した作品例】



また、学習形態は個人によるものを想定しているが、努力を要する状況と判断される生徒については、短い旋律を創作するという課題を与え、用いる音階を変化させてみるなど具体的な活動の方法について例示し取り組ませることで、個に応じた指導を充実させるよう留意する。

第3時では、前時に創作したサウンドロゴをグループで検討し、より表現したいイメージに近付ける工夫を行う。その際、用いる音素材を変えたり、テンポを変化させるなど音楽の諸要素を具体的に操作する活動を、グループで相談しながら取り組む場面を設定することで、創意工夫を具現化する学習となるよう留意する。

【第3時で表現を工夫した作品例】



この活動では、シンセサイザーを活用することで様々な音素材を用いて創意工夫できるようにしたり、コンピュータを用いてMIDIやサンプリングによる作品創作をできるようにしたりするなど指導体制の工夫により、生徒の創造性を引き出す学習活動とする手立てが考えられる。

第4時では、創作した作品を発表し、生徒同士が批評する学習活動を行う。発表に際しては、実際に演奏する以外にも、録音したものを再生するなど、生徒や学習環境の実態に即した方法で作品を共有するよう配慮する。また、批評に関しては、生徒の作品が表現しているテーマをクイズ形式で解答させるなど関心・意欲を高めるための手立てを講じるとともに、作品から感じ取ったイメージを具体的に言葉で述べる

【第4時で使用するワークシートの例】

**班の発表

- テーマ予想：
- 上記のように感じた理由を、具体的に書いてみよう。
(音色、リズム、速度、旋律、強弱などに注目する)

ことができるようワークシートを構成し、言語活動の充実を図る指導が考えられる。

このように指導方法等を工夫することにより、個に応じた指導を充実させることが可能となる。

[美術・工芸]

1 学習指導と評価の改善・充実

学習指導要領は、基礎的・基本的な知識・技能の習得と思考力、判断力、表現力等をバランスよく育てることを重視している。そのためには、学習評価において各観点ごとの評価をバランスよく実施するなど、指導と評価を一体的に行うことが重要である。

美術・工芸に関する科目の内容は、「A表現」、「B鑑賞」の二つの領域で構成され、「A表現」領域の分野は、「美術・工芸への関心・意欲・態度」、「発想や構成の能力」、「創造的な技能」の3観点を評価し、「B鑑賞」領域の分野は、「美術・工芸への関心・意欲・態度」、「鑑賞の能力」の2観点を評価することとなっている。

2 「確かな学力」を育成する取組の改善・充実

(1) 指導方法や指導体制の工夫改善による個に応じた指導の充実

ここでは、日本と西洋の絵画の題材を比較しながら鑑賞する学習活動において、ワークシートを活用した個に応じた指導の事例を紹介する。

【図①】は、本事例の題材の目標と評価規準である。浮世絵と西洋の絵画を比較しながら鑑賞させて、表現方法等の違いに気付かせるとともに、作品の美しさや作者独自の表現を求める芸術の普遍的な心情など、その共通性にも目を向けさせ、日本及び諸外国のそれぞれの美術作品のよさや美しさなどを味わわせることをねらいとした事例である。

【図①】「日本と西洋の絵画」の題材の目標と学習活動に即した評価規準

題材の目標	
日本の浮世絵や西洋の絵画に関心を持ち、造形的なよさや美しさ、作者の心情や意図、造形的な表現の工夫などを感じ取るとともに、浮世絵と西洋の絵画作品の共通性や相違に気づき、日本と西洋の美術の交流などの関わりを理解する。	
学習活動に即した評価規準	
美術への関心・意欲・態度	鑑賞の能力
浮世絵や西洋の絵画の形や色彩などの特徴や印象、本質的なよさや美しさ、作者の心情や意図と創造的な表現の工夫などに関心をもって主体的に感じ取ろうとし、日本と西洋の美術の共通点と相違などに関心をもち、主体的に美術文化への理解を深めようとしている。	浮世絵や印象派などの作品の形や色彩などの特徴や印象などから、作品の本質的なよさや美しさ、作者の心情や意図と創造的な表現の工夫などを感じ取り、日本と西洋の美術や文化の共通性と相違に気づき、それぞれのよさや美しさなどを味わっている。

学習活動を円滑に進めることと、生徒一人一人の取組を適切に評価することを目的として、【図②】にあるワークシートを作成している。このワークシートには、5つの設問があるが、これらは生徒の思考が徐々に深まるように段階を追って学習が進められるように設定しており、参考として、生徒の記述例を掲載している。鑑賞の学習を行うに当たっては生徒一人一人の鑑賞の経験や身に付けている鑑賞の能力には違いがあることが考えられ、最初の設問では、「2枚の作品のどちらが好きですか。好きな絵とその理由を書きましょう。」と問うことで、まず全ての生徒が対象をしっかりと見ることを重

視している。どちらが好きかということとその理由を記述させることで、鑑賞の体験が少ない生徒でも作品と向き合うことができるようにし、自分の見方や感じ方を大切にしてい作品を鑑賞できるようにしている。

設問が進むにつれ、生徒の学びがより学習の目標へとつながるように設定されている。鑑賞の学習において造形的な視点を豊かにもって対象を捉えさせるためには、言葉で考えさせ整理させることも大切である。言葉にすることにより、それまで漠然と見ていたことが整理され、よさや美しさの要素が明確になる。

ワークシートを用いることにより、題材のねらいを明確にし、ねらいに応じて設問を設定することで、生徒の学習をより円滑にすることができる。表現の学習では「発想や構想の能力」や「創造的な技能」の実現状況が、アイデアスケッチや作品という形で表出するが、鑑賞の学習で身に付ける「鑑賞の能力」は、生徒の内面で作り出された自分なりの意味や価値から生徒の学習状況としての実現状況を見取るためには、何らかの形で感じたことなどを表出させる必要がある。

この点においてワークシートの活用は有効な方法の一つと言える。ただし、その反面、記述させることのみが目的化してしまったり、見方や感じ方を固定化させてしまったりすることも考えられる。ワークシートの活用に当たっては、指導のねらいとする内容を生徒が実現するための手立てと指導者が実現状況を見取るという両方の視点から工夫することが求められる。

授業終了後にワークシートを回収し、記述内容等を基に「鑑賞の能力」の観点の評価をすることとしている。

【図②】ワークシート

日本と西洋の絵画について —その共通性と相違—	
年 組 番 氏名	
問1. デューラーとゴッホの「自画像」	
○2枚の作品のどちらが好きですか。好きな絵とその理由を描きましょう。 デューラーの絵の方が写真のように描かれていて、難しそうだし上手いと思う。	
○それぞれの絵の印象や特徴、2枚の作品の共通点や相違点、色彩や形や構図などの特徴を書きましょう。	
・デューラー：顔に当たっている光が印象的です。写真のようだが不思議な感じ。	・ゴッホ：人物は一点を見つめているように座っている。顔がたくさん使われ、荒い感じに色が塗られている。
問2. 初期のゴッホと後期のゴッホ	
○写真のように描いていたゴッホは、なぜ作風を変えたのでしょうか。 写真のような絵は上手いけど、みんな同じ感じになる。後半の絵は、他の人が描いていない独自の描き方なので、人にはない良さがあるから。	
問3. 日本と西洋の絵画について「共通点や相違点」などを考えよう。	
○浮世絵とデューラー ゴッホと同じような構図だが、背景が暗く何も描いていない。	○浮世絵とゴッホ 色ははっきりとしている。ゴッホの絵の後に浮世絵が描いてある。
問4. デューラーおよびゴッホの「自画像」、浮世絵3枚を鑑賞して、感じたことや考えたことを書きましょう。	
※形の描き方、色彩の色合いや明るさ、立体感の表し方、全体のイメージなどに注目して記入しよう。 3枚ともおなじような構図で人物を描いているが、描き方によって印象が違う。デューラーが写真のようで、写実が漫画のように描いている。ゴッホはその中間である。また、デューラーの絵はリアルに表現しようとしているが、写実の絵は表情や動きが強調されている。	
問5. 3枚の絵から1枚を選び、その絵の良さや作者の意図などを書きましょう。	
※形の描き方、色彩の色合いや明るさ、立体感の表し方、全体のイメージなどに注目して記入しよう。 ゴッホの自画像は、静かに座っているように見えるが、黄色と緑の色や、荒い筆のあとなどから激しさを隠した心象を表現したかった感じがする。	

(2) 学習指導要領のねらいに即した効果的な指導の実践事例

次に、美術における言語活動を充実させる取組を行った事例を紹介する。

【図③】が、本事例の題材の目標と評価規準である。本題材では、まず個人で美術作品を鑑賞し、その作品の特質について調べ、その後、グループをつくり、感じたことや考えたこと、調べたことなどを話し合い、美術文化の理解を深めることをねらいとしている。

【図③】「日本の美術の伝統と創造」の題材の目標と学習活動に即した評価規準

題材の目標	
日本の美術の歴史や表現の特質に関心をもち、異なる時代の美術作品における主題や表現方法の相違や共通点などから作品のよさや美しさを感じ取り、美術文化について理解を深める。	
学習活動に即した評価規準	
美術への関心・意欲・態度	鑑賞の能力
日本の美術の歴史や表現の特質に関心をもち、主体的に作品のよさや美しさを感じ取り、美術文化についての理解を深めようとしている。	日本の美術作品における主題や表現方法の相違や共通点などから作品のよさや美しさを感じ取り、美術文化についての理解を深めている。

本取組では、【図④】のワークシートを活用している。最初に生徒が個人の活動として絵巻、障屏画、浮世絵のいずれかの作品を鑑賞し、作品の特質などについて調べる。その後、同じ時代の作品を調べた生徒同士でグループを作り、それぞれが調べたことを発表し合い、作品の相違点や共通点について話し合いを行う。4～5人のグループで話し合い意見交流を行うことにより、自分一人では気付かなかった感じ方、考え方などに気付かせる。

次に、絵巻、障屏画、浮世絵のうち、自分と異なる作品を調べた生徒同士が一緒になる新しいグループを作り、前時のそれぞれのグループでの話し合いを受けて、感じたことや考えたことなどを発表し合う。

発表の後には質疑応答を行い、自分が鑑賞したり、調べたりしていない作品などについての理解が深まるようにする。最後に、全ての作品を現代の視点から鑑賞し、伝統的、創造的な側面について話し合い、グループごとに考えをまとめ、話し合いが終了したらそれぞれのグループで話し合ったことを発表し、他者の考え方や感じ方を共有する。グループ活動後は、個人でグループの話し合いなどの内容を基に美術文化について自分の考えを整理し、ワークシートにまとめる。授業終了後にワークシートを収集し、記述内容等を基に「鑑賞の能力」の観点の評価をすることとしている。

【図④】ワークシート

日本の美術の伝統と創造

- それぞれが調べたことを発表し、相違点や共通点をグループで話し合いましょう。
- 他の時代の作品を鑑賞したり、他のグループの人からの説明から下の枠内のことについて話し合っ、新たに感じたことや考えたことをまとめましょう。

・日本の独自の美意識 ・自然観 ・それぞれの時代の創造的な精神
 ・美を求める心情 ・創作への知恵
- 現代から見て「伝統的な側面」「創造的な側面」について自分の感じたことや考えたことを下の枠内にまとめてグループで話し合いましょう。

伝統的な側面	創造的な側面
- 今回の学習で「美術文化」について自分自身で感じたことや考えたことを書きましょう。

[書 道]

1 学習指導と評価の改善・充実

学習指導を充実させるには、学習評価を通じて、学習指導の在り方を見直すことや個に応じた指導の充実を図ることが重要であり、書道においては、次の4つの評価の観点及び趣旨を示している。

書への関心・意欲・態度	書表現の構想と工夫	創造的な書表現の技能	鑑賞の能力
書の創造的活動の喜びを味わい、書の伝統と文化に関心をもって、主体的に表現や鑑賞の創造的活動に取り組もうとする。	書表現の諸要素を感受し、感性を働かせながら、自らの意図に基づいて構想し、表現を工夫している。	創造的な書表現をするために、書の効果的な表現の技能を身に付け表している。	文字や書の伝統と文化について幅広く理解し、その価値を考え、書のよさや美しさを創造的に味わっている。

書道に関する科目の内容は、「A表現」、「B鑑賞」の二つの領域で構成され、「A表現」領域の分野は、「書への関心・意欲・態度」、「書表現の構想と工夫」、「創造的な書表現の技能」の3つの観点で、「B鑑賞」領域の分野は、「書への関心・意欲・態度」、「鑑賞の能力」の2つの観点で評価することとなっている。

2 「確かな学力」を育成する取組の改善・充実について

ここでは、国語科で学習した近代文学の作品の内容を踏まえ、漢字仮名交じりの書にふさわしい言葉（素材）を生徒が選定し書作品として表現し、互いに批評することを通して、表現力と鑑賞力を養うことを目的としたA校の実践事例を紹介する。

【単元と単元の目標】

単 元	書道Ⅰ 漢字仮名交じりの書
単元の目標	漢字仮名交じりの書の学習において、自ら選定した素材（文学作品の内容の一部）を書作品として表現するとともに、他の生徒の作品について、適切に鑑賞する。
重 点 項 目	具 体 の 取 組
① 表現学習の充実	ワークシートを活用して素材について思考させることにより、表現を工夫させる。
② 鑑賞学習の充実	よりよい表現を行うための過程を理解させることで、鑑賞の能力を高めさせる。
③ 言語活動の充実	素材の意見交換、書作品発表・批評活動を通して、言語活動に主体的に取り組ませる。
④ 国語科との連携	文学作品の理解を深め、自ら選んだ言葉で表現させることで、学習意欲を高める。

本単元における書道Ⅰの『「A表現」(1) 漢字仮名交じりの書』及び「B鑑賞」に関する評価規準は次の通りである。

【『「A表現」(1) 漢字仮名交じりの書』の評価規準】

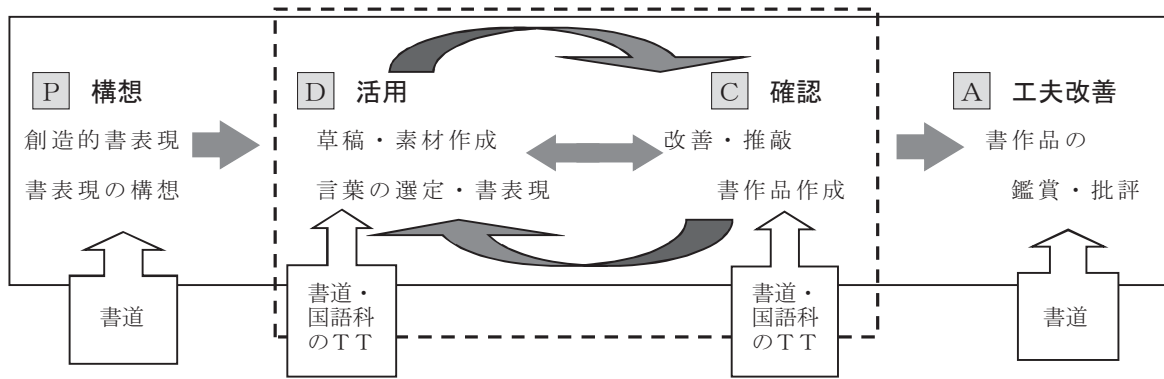
書への関心・意欲・態度	書表現の構想と工夫	創造的な書表現の技能
生徒自ら素材となる言葉を推敲し、主体的に表現しようとしている。	文学作品から感じ取ったことを思考し、表現を工夫している。	実用的な表現や芸術的な表現を理解し、漢字と仮名の線質の調和を図る技能を身に付け表している。

【「B鑑賞」の評価規準】

書への関心・意欲・態度	鑑賞の能力
鑑賞を通し、書の美しさと表現効果を味わい、書への関心を高め、意欲的に自己の作品に生かそうとしている。	鑑賞と表現が相互に関連していることを理解し、身に付けた知識を活用しながら、批評や改善等を伝えることができる。

国語科との教科横断的な連携により、ことばの選定、推敲を行う作業を通して、登場人物の視点に立つことで、表現が豊かになることが期待できる。また、素材の選定やことばづくり等において、瞬間的なインスピレーションに頼るのではなく、自己の意図や想像をどのように具体化させるかについて深く考えさせることを通して、自己の作品の表現力のみならず、他の作品の鑑賞の能力を高めることにつなげることができる。

具体例として、宮沢賢治の作品「永訣の朝」を用いた取組を次に示す。



まず初めに、書道において創造的書表現（漢字と仮名の線質の調和を図る技能等）と書表現の構想（文学作品の内容の一部を選び書作品で表すこと）について指導した後、書道と国語科のチーム・ティーチングにおいて、ワークシートを用いて作品内容を踏まえた書の素材案について考えさせる。

【実際の指導に使ったワークシートの一部】

国語科【宮沢賢治 永訣の朝】	書道【漢字仮名交じりの書】	素材
【兄の視点】	→	例【最愛の妹との永遠の別れ、ああとし子】
【妹の視点】	→	例【今度生まれたら、人のために苦しみたい】

次に、書道と国語科のチーム・ティーチングにおいて、書表現を踏まえた素材の改善・推敲を重ね、書作品を完成させ、書道において、互いの作品についての鑑賞・批評を行う。

このサイクルでは、生徒の状況に合わせて、D「活用」からC「確認」（場合によってはC「確認」からD「活用」）への時間配分の調整や指導の繰り返しなど、授業の改善・充実につながるように手立てを講じる必要がある。

生徒の授業評価から、国語科の学習内容と関連付けて、書表現の素材案を各自が選び、それについてグループで意見交換を行ったことに対する評価が高かった。他教科等との連携による授業改善につながった事例のひとつである。